

献辞あれこれ

野間 正二

英語で inscription とか dedication と呼ばれるものがある。日本語で言えば、献辞とか献詞とか献題にあたるものだ。

献辞とは、「著作物を献呈するために記したことが」という意味である。本を開くと、最初に目につくのが、この献辞である。

もちろん、すべての本に献辞がついているわけではない。欧米の本では比較的多く見られるが、日本の本では少ない。

私も『Japanese Theater/比較文化的に見た日本の演劇』（大阪教育図書）の英語バージョンのほうには献辞「To Susan Dimitroff」をつけた。ただし日本語バージョンのほうにはつかなかった。（この本は英語とその日本語訳で1冊となっている。）

この拙著は、アメリカの大学での講義がもとになっている。その講義中、最前列の席で熱心に聞いてくれたのが、聴講生のスーザン(Susan)さんだった。

50歳代だった彼女は、広く芸術と文化に強い関心をもっていた。その彼女の関心にこたえるかたちで、講義もし原稿も書いたのである。しかも最後には私の原稿の英語のチェックもして頂いた。だからスーザンさんにこの本を献じたのである。

以上は、私の場合である。だが、他の人の場合も、似たようなものと想像する。つまり大抵、その人にはこの本をぜひ読んでもらいたい、或いは、ぜひ読んで欲しかった、という気持ちを込めて、その人の名前を記しているはずだ。

I

たとえば、次の作品は、だれに献呈されているでしょうか。ちょっと考えてみてください。

- 1)『愛と認識との出発』 2)『暗夜行路』 3)『インドへの道』 4)『オーランドー』 5)『お目出たき人』

- 6)『カラマーゾフ兄弟』 7)『トリストラム・シャンディ』 8)『ドン・キホーテ』 9)『ティファニーで朝食を』 10)『ノストローモ』 11)『白鯨』 12)『百年の孤独』 13)『ふらんす物語』 14)『武器よさらば』 15)『ライ麦畑でつかまえて』

- ア) アンナ・グリゴリエヴナ・ドストエフスカヤ
イ) 後れて来たる青年 ウ) サックヴィル・ウエスト
エ) ジェド・ロス・マスード オ) ジャック・ダンフィー
カ) ジョン・ゴールズワージー キ) 高島平三郎
ク) 永井素川 ケ) ナサニエル・ホーソン コ) ホミ・ガルシア・アスコート
マリア・ルイサ・エリオ
サ) 我が母 シ) ピット閣下 ス) G・A・プファイファー
セ) ベーハル公爵 ソ) 武者小路實篤

どれぐらいわかりましたか。正解は以下の通りです。（解答：1)-イ), 2)-ソ), 3)-エ), 4)-ウ), 5)-キ), 6)-ア), 7)-シ), 8)-セ), 9)-オ), 10)-カ), 11)-ケ), 12)-コ), 13)-ク), 14)-ス), 15)-サ)）

ついでというのも変ですが、作者名はどうですか。一応、作者名を書いておきます。1) 倉田百三 2) 志賀直哉 3) フォスター 4) ヴァージニア・ウルフ 5) 武者小路實篤 6) ドストエフスキー 7) ローレンス・スターン 8) セルバンテス 9) カポーティ 10) コンラッド 11) メルヴィル 12) ガルシア・マルケス 13) 永井荷風 14) ヘミングウェイ 15) サリンジャー

II

先の献辞の例でも示したように、『白鯨』(1851)を書いたのは、ハーマン・メルヴィル(1819-91)である。メルヴィルは、19世紀アメリカにおける最も偉大な作家だと言われている。

しかし、その名声も最近50年ぐらいのことだ。生前は不遇な作家だった。47歳からは、ニューヨーク

の税関の検査係になって、生活を支えなければならなかったほどである。

現在のメルヴィルの名声は、おもに1840年代から50年代にかけて書かれた長編によっている。

たしかに長編は重厚で面白い。だが、同じ50年代に書かれた短編も、実は、たいへん面白い。

メルヴィルの短編の面白さは、これまで日本はもちろん、欧米でも、あまり指摘されていない。だが、全部で15篇ある短編は、そのそれぞれが、じっくりと読めば、長編とは違った、ある意味で、知的で軽やかな面白さがある。

Ⅲ

そこで、実際に、メルヴィルの短編の面白さの一端を示したい。15の短編の中に『二つの教会』という短編がある。

この『二つの教会』は、シェリダン・ノウルズに献辞されている。もう少し正確に言うと、タイトルの下に、「シェリダン・ノウルズに献呈する」と書かれている。

作品に献辞を添えることは、欧米では、先に述べたように、稀(まれ)ではない。だから、気にすべきでないのかもしれない。

ただし、次の3点を考えれば、無視すべきではないだろう。

まず第1に、他の14篇の短編には献辞は書かれていない。第2に、メルヴィル自身が英国の脚本家シェリダン・ノウルズ(1784-1862)と面識があったとは思われない。第3に、この作品中でノウルズについては何も語られていない。

Ⅳ

では、メルヴィルは、一体、どんな意図で、この短編をノウルズに捧げたのだろうか。

そのことを考えてみたい。その前に、『二つの教会』が、どんな作品かを説明しておく。

『二つの教会』は、ユニークな構成の短編で、前半の「第一の教会」と後半の「第二の教会」というさらに短い作品から成り立っている。その2つの小品は、互いに密接に関連していて、いわばペアの小品と言える。

前半の「第一の教会」では、語り手がニューヨークの豪華な教会で経験したことが語られる。語り手

は貧しい身なりをしていたので、その豪華な教会の礼拝に加わることを拒絶された。そこで脇の入り口からこっそり忍び込んで、通風孔から説教を聞いた。だが、そこから出ようとしたとき、その入り口には錠が掛かっていたので、仕方なく寺男に助けを求め、けっきょく警察に突き出された。そして語り手は、罰金を払ってやっと釈放された。

後半の小品「第二の教会」では、同じ語り手がロンドンの劇場で経験したことが語られる。語り手は、ニューヨークでのその屈辱的な経験の後、2人の女性のお供をして旅行するという仕事を見つけて、ロンドンにやって来た。だが、ロンドンで解雇された。

冬のロンドンを、お金もなく寂しい気持ちでさまよっているとき、名優マクレディが枢機卿リシュリュウを演じている劇場に出くわした。その芝居をむしろ見たいと思っていると、劇場から出てきた労働者が半券をくれた。その好意のおかげで、語り手は天井桟敷でその芝居を見ることができた。

舞台上の枢機卿リシュリュウは、本物の聖職者以上の宗教的感動を、語り手だけでなく観客にも与えた。そこで語り手は、教会について考えざるをえなかったと語って、この小品を終える。

以上が、2つの小品の要約である。この要約からも明らかなように、この作品では、豪華な教会が批判されている。それは明白だ。

しかもその記述を読めば、当時の読者には、その教会がグレース教会で、寺男がアイザック・ブラウンであることがわかった。

それゆえ、この作品は、読者の反発を恐れた出版者側の配慮で、1924年まで出版されることはなかった。

だから『二つの教会』は、本来の責務を忘れている特権的で豪華な教会を皮肉たっぷりに描いた作品である、と解されてきた。実際、それがこの短編の解釈の定説であった。

Ⅴ

だが、この定説に従う限り、たとえば「天井桟敷の人びと」ではなく、なぜあえて「ノウルズ」に献呈されているのかが、謎として残る。

さらに特権的な教会批判が、あまりにも明白すぎる点も気になる。プロパガンダとしてではなく、文学として、作品を書こうとしていたメルヴィルにす

れば、その明白すぎる点が拙劣に思え、私は得心できないのだ。

では、他にどんな読み方があるのか。

『二つの教会』は、実は、メルヴィルの体験をもとにした作品だ。詳しい証明はここでは割愛するが、ニューヨークとロンドンでのメルヴィルの体験や見聞が、直接的に反映されている作品である。

ところが、1か所だけ、反映されていないところがある。マクレディに関する記述が正反対なのだ。

メルヴィルは、ロンドンで、マクレディの演技を見ている。そして日記には、マクレディに落胆したと記している。

一方、作品中では、マクレディの演じた枢機卿は本物以上の宗教的感動を与えたと、マクレディを絶賛している。

もちろん、豪華な教会とその聖職者を批判するためには、天井桟敷で貧しい人びとと共に見た枢機卿の姿に感動する必要がある。役者が演じているに過ぎない聖職者に、本物では味わえなかった宗教的感動を得たと語れば、特権的な教会に対する批判は確実に伝わるからである。

ただし、それだけが、作者メルヴィルがマクレディの演技に落胆しているながらも、作品中では彼の演技を絶賛した理由ではない。

そう考える根拠は、作品中にある。語り手は、「マクレディ氏が温和な紳士で、社会的にもキリスト教徒としての態度においても最高の美質をそなえ…(略)…さまざまやり方で良心的にこれまで多くのことをやってきたのだった」と、マクレディを人格的にも道徳的にも絶賛する。しかもこの絶賛は、唐突なのだ。だからこの人格的道徳的絶賛は、読者には印象深い。

ところが実際のマクレディは、温和ではなく、「傲慢で激情的な性質」でよく知られていた。

またメルヴィルは芝居好きだった。そんな芝居通のメルヴィルには、役者の人格的道徳的絶賛が、役者の本質的な賛辞にならないことはわかっていたはずだ。

それにもかかわらず、メルヴィルは、マクレディの実像から離れる危険を冒してまで、マクレディの人格や徳性を絶賛し、それを強調している。それはなぜか。

さらに、もし仮にこの短編が豪華な教会を批判す

るだけの作品であるなら、役者の人格や徳性をほめあげることは、必要ない。というより、むしろ逆効果だ。たとえば破廉恥な役者の演じる聖職者が、本物の聖職者よりも深い宗教的感銘を与えると語ったほうが、見せかけと実体の対比はより鮮やかになり、本物の聖職者に対するアイロニカルな視点も鮮明になる。それゆえ特権的な教会への批判も、より辛辣になる。

それにもかかわらず、マクレディ個人の人格と徳性への最高の賛辞が唐突に語られている。それはなぜか。

VI

これらの疑問に答えるためには、まず、この絶賛を、コンテキストの中で考える必要がある。

先にも述べたように、『二つの教会』は、「第一の教会」と「第二の教会」という小品がペアになっている。そして教会と劇場、聖職者と役者、寺男と劇場案内人、会衆と観客、というように、それぞれが対応している。その基本にあるのが、米国への批判と英国への共感、という構図である。

この構図の中で、英国人俳優マクレディへの絶賛が語られているのだ。すると、当時の読者は、米国人俳優フォレストを思い浮かべたに違いない。

というのは、マクレディとフォレストは、長い間強烈なライバル関係にあり、ついには1849年5月10日に、アスター・プレイスの騒乱という大暴動を引き起こしていたからだ。

フォレストの熱狂的な支持者たちは、ライバルのマクレディのニューヨークでの公演を阻止しようとして劇場前に集まってきた。その数2万5千人にも達した。暴徒化した群衆は、民兵や警官隊と衝突し、少なくとも22名が死亡した。この一種の内乱状態は翌日も続いた。ニューヨークの長い歴史の中でも、深刻な重大事件だった。

わずか数年前に、このような重大事件を引き起こしたマクレディとフォレストのライバル関係は、当時の読者には、まさに生々しい現実だった。

つまりマクレディとフォレストは、一対として思い出される人物たちだった。

さらにマクレディとフォレストとは、演技の質も対照的だっただけでなく、生き方も対照的だった。アンサンブルを重視して洗練された演技をしたマク

レディは、58歳で名声に包まれながら引退した。

一方フォレストの演技は、生来の声や身体の魅力に頼った、教養や洗練の感じられないものだった。また彼は、病弱の人を背後から襲うという卑劣な事件もおこし、その晩年は地方の巡業で暮らすという寂しいものだった。

とすれば、先の英国と米国の対比の構図の中で、英国人俳優マクレディの人格と徳性が絶賛されるとき、読者は、ごく自然に、米国人俳優フォレストの対照的な人格や徳性を思い浮かべただろう。

むしろ、実像から離れる危険を冒してまでマクレディの人格や徳性を、あえて唐突に絶賛したのは、フォレストの正反対の性質を暗示し、読者にアスター・ブレイスの騒乱を想起させるためだった、と考えられる。

VII

そのアスター・ブレイスの騒乱に、この作品の作者メルヴィルも関係しているのである。

マクレディが1949年5月7日にニューヨークで初日の公演をしたとき、フォレストの支持者たちは、劇場内で騒ぎ上演を妨害し、公演を中止に追い込んだ。

それでマクレディは、全公演をキャンセルして、ロンドンに帰ろうとした。ところがメルヴィルを含む47名のニューヨークの文化人たちが、マクレディの公演の続行を嘆願した。その嘆願書が新聞で公表されたこともあり、マクレディは翻意して、10日の公演を強行した。その結果が、先のアスター・ブレイスの騒乱となった。

だからメルヴィルも、マクレディに対して、ある種の負い目を感じていたのではないか。マクレディに対して償いをしたい、という気持ちをもっていたのではないか。

そういうメルヴィルの償いの気持ちが、マクレディの人格と徳性を、唐突に絶賛することばとなって表れたと考えるのだ。

また、そう考えると、マクレディの演技に実際は落胆していながらも、作品中では絶賛しているのも納得がいく。あえて絶賛することで、償いの気持ちを表していると考えられるからだ。

そのうえ、そう考えると、最初の謎であった、ノウルズへの献辞も納得がいく。

ノウルズは、当時の英国で最も人気ある脚本家だった。その人気は、名優マクレディがその脚本を演じることで生じていた。脚本家ノウルズと名優マクレディは、切っても切れない関係だった。そのことは、当時、周知の事実だった。

だからメルヴィルは、この短編をノウルズに捧げることで、ノウルズとマクレディの連想関係を利用して、この短編がマクレディに捧げられていることを暗示しようとしたのである。

もちろんマクレディ本人に献呈することは、当時のアメリカでは危険すぎる行為だった。なぜならマクレディに反発して、アスター・ブレイスの騒乱が起きたのは、わずか数年前のことだった。(騒乱当時、マクレディの支持を公表していたメルヴィルは、家族の身の危険すら感じていた。)

つまりメルヴィルの米国人読者への配慮が、ノウルズへの献辞という「謎」を生み出したのだ。

また、その読者への配慮が、特権的で豪華な教会批判という明白な意匠を生んだ。なぜなら、その批判は、だれにでもわかるだけでなく、多くの一般の読者の支持を得やすい。結果として、この作品が支持され、面白く読んでもらえる可能性が高い。だから特権的で豪華な教会を批判した。

ところが一方、特権的で豪華な教会批判という意匠を隠れ蓑(みの)にして、英国人マクレディへの償いの気持ちを、少数のわかってくれる人だけに、伝えようとしたのだ。

作者メルヴィルは、マクレディに対する償いの気持ちを、マクレディの演技を絶賛するだけでなく、その人格と徳性をも唐突に絶賛することと、シェリダン・ノウルズにこの作品を献呈することで表している。

このように、献辞は、単に「著作物を献呈するために記したことば」であるだけでなく、作品の隠された意図を読み解くための、手がかりとなる場合がある。

(京都府立大学文学部教授・文学博士)